

委託事業実施内容報告書
平成22年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【日本語教室の設置運営】

受託団体名：NPO法人 プロジェクトまえばし

1 事業の趣旨・目的

(1) 事業の目的

外国人が、日本語能力を向上させることによって、その持てる知識・技能を活用し、みずから情報を発信する側となって、積極的に地域の活動に参加できるよう、日本語学習の支援を行う。それによって、外国人自身の十分な自己実現を図るとともに、地域の活動を活性化し、多文化が共生する、文化的に豊かな地域の形成に貢献することを目指す。

具体的目標として、地域の自治会、文化・教育団体が中心となって例年開催している文化祭に教室として参加し、日本人住民に受講者の出身国の文化を紹介し、相互の交流を図ることを目指す。

(2) 経緯・沿革

・地域の状況

前橋市総社町およびその周辺地域に立地する多くの企業でブラジル人を中心とした外国人の雇用が進み、地域にブラジル人学校、ブラジル人教会、ブラジル食品店などができるまでにその数が増加している。近年のいわゆる経済危機に伴い、多くの外国人が帰国したとはいえ、両親の母語を維持していない学齢期の子どもがいる等の理由から当地にとどまる者も多く、依然として集住地区となっている。公立の小中学校、保育園に通う外国人児童も多い。最近では、中国人、インドネシア人を中心とした技能実習生も増加している。

これに伴って、地域の日本人住民と外国人との間で、主として言葉の障壁による様々な生活上の軋轢が生じている。

また、NPO法人プロジェクトまえばしでは、日本語教室「はればれ」開設以前から、在住外国人と日本人住民との交流イベントなどを通じて地域の外国人の抱える問題、要望などの聞き取りをおこなってきた。そこに寄せられた内容は、「役所や公共機関等で、書式の読み方・書き方が分からなくて困った」、「緊急のときに、医療機関の利用法が分からなかった」、「母語よりも日本語のほうが流暢になってしまった自分の子どもとの会話に困難を感じることもある」、「役所での手続きなどに、自分より日本語のできる学齢期の子どもを通訳として同伴せざるを得ないことがある。その際は、子どもには学校を欠席させることになり、学業に支障がでる」、「職場でも意思の疎通が自由に図れないため、自分に非のないことでも非難され、それについて釈明も反論もできない」といったものである。つまり、日本語能力が十分でないために、生活上のごく些細なこと一つ一つに不便をおぼえ、さらに自分に対する誇りや自信も失いかねないという状況がうかがわれる。

一方、群馬県には日本語学校等がほとんどなく、生活者として学べる場は、地域の国際交流協会の日本語教室等に限られる。しかし、場所や時間・曜日等の制限のため、継続して学習するところが困難である。

・昨年度・一昨年度の事業目的

上記の地域状況に鑑み、一昨年度、昨年度と、主として外国人の生活の実質的な改善を目的に日本語教室を開設・運営してきた。すなわち、「外国人が、言葉の壁による生活上の不安を解消し、「はればれ」とした心で、自尊心を持って自立した生活が出来るようになる」というのがその目標であり、日本語教室の名称「はればれ」にこめた願いでもある。

この目的の実現に向けて一定の前進が見られたことを受け、さらにそれを発展させたものが今年度の事業目的である。すなわち、先ず自らの生活を改善し、今度はそれを地域社会にも還元する、それによってさらに自分に対して自信がもてるようになる、というものである。したがって、今年度の目的も、この昨年度・一昨年度の目標の実現をより確実なものとしてゆくことなしには実現しえない。

(3) 本事業の特質

上記の目的実現のため、当日本語教室では、以下の点を特に考慮した。

・授業時間：

学習の動機付けおよび学習事項の演習の時間を確保し、かつ学習者が無理なく継続できるよう、一回の授業時間を2時間30分とした。

・授業日：

平日は働いている学習者の事情を考慮し、まとまった時間が取れる日曜日を授業日とした。ただし、日曜日は学習者が家族と過ごすための貴重な時間である事も考慮し、午前中で終了するよう設定した。

また、日曜日の授業に毎回参加することが困難な学習者、週1回のグループ授業では十分な学習効果がえられない学習者には、補習授業を行った。

・教室開設場所：

今年度は、総社公民館で教室を開設した。

公民館は地域の様々な文化・教育関係の団体が活動に利用している場であり、したがって、ここで教室を開くことで、これらの団体の関係者に教室について知ってもらうことができ、交流する機会も生まれやすくなる。

また、公民館の利用予約手続や鍵の借りだしなどを、スタッフと受講者で共同で行い、受講者にも教室運営に参加する機会をつくった。

・広報活動：

地域の多くの在住外国人が足を運ぶ輸入食材店や外国人学校、および外国人を多く雇用している地元企業を中心にチラシを配布した。同時に地域の人的つながりを生かして紹介活動を行った。また、他の国際交流団体、NPO法人のウェブ・サイトでも紹介してもらった。

・託児所の設置、送迎の提供：

子供のいる学習者・スタッフが安心して参加できるよう、資格のある保育士のいる託児所を毎回設置した。託児所では文字や数字を使った遊びを取り入れ、外国人児童の日本語学習にも資するものとした。また、児童向けの簡単な外国語の授業も行い、外国人児童の母語の維持を図ると同時に、日本人スタッフの子どもを含めた児童が、自然に多文化・多言語の環境に親しめるように心がけた。

容易に利用できる交通手段がない学習者には、可能な限り送迎をおこなうように努めた。

・クラス分け：

今年度は、より柔軟に学習者の要望に応え、同時に学習者の自主性を促すことを目的とし、また継続参加の困難な学習者が多いという事情を考慮して、固定したクラスは設けず、各授業日に参加した受講者の要望を聞いて、各受講者の日本語能力を考慮した上で、その場でクラス分けを行うという形で始まった。ただし、後半では、受講者の学習目標がしぼられ、一貫性のある授業が望まれたことから、文法・会話クラス、能力試験対策クラス、表記クラス等、ある程度固定したクラス分けとなった。

・教材：

基本的に市販の教材を利用した。

文法、かな・漢字学習、能力試験対策など、目的別に代表的な教材をそろえ、受講者が自分に合ったものを選べるようにした。同じ教材を継続して使用することで、受講者にとっては自己の学習の進捗状況がよく分かり、またそれを学習し終えたときには大きな達成感がえられるという効果もある。

・教室スタッフ：

資格・経験のある日本語教師、学習者の母語に通じ、外国と日本の言語や文化の

違いを熟知している日系人通訳、学習者の母語を学んだ経験のある補助員の連携で、日本人スタッフと学習者の意志の疎通を容易にし、きめ細かい指導ができるよう図った。また、地域の生活者でもある受講者の簡単な生活相談には常に応じられる態勢をとった。

・ **運営委員会：**

地域の人的な結びつきを生かし、学識有識者、地元自治会関係者、NPO法人関係者等により構成される運営委員会を設立し、効果的・効率的な教室運営を行うことを図った。

・ **日本語指導および授業内容：**

各受講者に個人記録カードを用意して、最初の授業の際に自身の日本語力の現状と目標を書いてもらい、受講者の要望を的確に把握できるように努めた。

毎回の授業内容・教材は、原則として受講者の要望を聞いて決めていった。

毎回、受講者自身にその日の学習記録を書いてもらった。学習テーマだけでなく、覚えた言葉や表現、簡単な日記まで書いてもらい、受講者の学習の振り返り、スタッフ間の授業の引継ぎに資するものとした。

「漢字文化圏の出身で、読み書きはできるが、聞き取りが難しい」、「在住期間が長く、会話はできるが、読み書きは平仮名・カタカナでも大変」、「日本語能力試験を受けたい」と、日本語学習について多様な事情を抱える学習者の個別的な要望に応えられるよう、必要に応じて個人指導もおこなった。

他の日本語教室関係者の見学を積極的に受け入れ、日本語指導に関する知識・情報の共有、蓄積を図った。これにより地域全体の日本語指導の質の向上も期待できる。

・ **イベントの開催・地域の文化祭への参加：**

受講者が学んだ日本語を活かして自国の文化を紹介しながら地域の日本人と交流する場として、または日本の文化に触れる場として、イベントを開催した。

特に今年度は、この総社町地域の自治会や様々な文化団体を中心となって例年開催している「総社地区文化祭」に教室として参加して、模擬店で受講者の出身国の料理を出し、文化紹介、地域住民との交流に努めた。

2 運営委員会の開催について

(1) 概要

本事業の目的実現のため、日本語教室運営に関する協議と検討を行う。

(2) 運営委員

瀧澤 清美	群馬大学医学部附属病院 医療診療部
佐藤 宏	総社町元自治会長、きらり総社会長、元気さん会長
坂庭 知恵子	元高校教師、民生委員
増木 里美	前橋市国際交流協会講師、JIAEC 日本語指導員
小林 肇	私設地域文庫主催

(3) 各会議の概要

・ **第一回**

①日 時：2010年（日）4月25日13：00～15：00

②場 所：総社公民館 講義室

③出席者：増木里美、坂庭知恵子、瀧澤清美、佐藤宏、小林肇

④議 題：

〔1〕22年度文化庁委託事業の目標と計画

〔2〕日本語教室開講にむけての準備、役割分担

〔3〕今後の日程

⑤概 要：

今年度事業の目標、計画、日程等についての確認が中心であったが、今年度から

教室開設場所が変わったので、当日に混乱がないよう、授業の準備や授業日の一日の流れ等についても確認した。

・ **第二回**

①日 時：2010年7月18日（日）13：00～15：00

②場 所：総社公民館 小会議室

③出席者：増木里美、坂庭知恵子、瀧澤清美、佐藤宏、小林肇

④議 題：

〔1〕スタッフの振り返り

〔2〕教室運営について

〔3〕交流イベントについて

⑤概 要：

教室スタッフから、授業その他の教室の状況について報告。主として授業内容・クラス分けの方法等について検討した。

また、交流イベントについて、準備、役割分担、当日の日程など検討・確認した。

・ **第三回**

①日 時：2010年12月19日（日）9：00～11：00

②場 所：けんこうサロン なでい

③出席者：増木里美、坂庭知恵子、瀧澤清美、佐藤宏、小林肇

④議 題：

〔1〕22年度事業の反省

〔2〕事業終了後の日本語教室について

⑤概 要：

事業の終了を受けて、教室運営、授業、イベント等の全体にわたって振り返り、検討した。

また、事業終了後、どのような形で教室を継続していくかについて検討した。



3 日本語教室の開催について

(1) 日本語教室の名称：日本語教室 はればれ

(2) 開催場所：

・ 総社公民館

（所在地：群馬県前橋市総社町総社1596-1）

・ 前橋市立第六中学校（第18回授業（総社地区文化祭参加）のみ）

（所在地：群馬県前橋市総社町総社1762-1）

(3) 学習目標：日本語力を向上させることで、自身の知識・技能を活かして、自ら情報を発信し、地域の活動に積極的に参加して、自己実現を図るとともに、地域を活性化し、多文化が共生する、文化的に豊かな地

域の形成に貢献する。具体的な目標として、地域の文化祭に教室として参加し、出身国の文化を他の参加者・団体、地域の住民に紹介し、交流を深めることを目指す。

(4) 使用教材・リソース：

日本語の教え方スーパーキッド、新文化初級日本語、文化初級日本語、文化中級、中級から学ぶ日本語、新日本語の基礎漢字練習帳、ストーリーで覚える漢字300、にほんご宝船、おしゃべりのたね、みんなの日本語、「日本語能力試験」対策・日本語総まとめシリーズ、生教材

(5) 受講者募集の広報活動：

- ・方法：チラシ配布、教室スタッフあるいは受講者による紹介、インターネット上で紹介
- ・場所：ブラジル食品店、ブラジル人学校、人材派遣会社、群馬県国際交流協会、NPOサロンのホームページ、他の日本語教室
- ・時期：随時

(6) 受講者の総数：37名

(7) 開催時間数（回数）：55時間（22回）

(8) 日本語教室の具体的な内容

・授業

回	開催日	時間数	参加人数 (託児数)	国籍・母語	教授者・補助者・保育者人数	内容
①	5月9日 9:30-12:00	2時間 30分	10名 (4名)	ブラジル、ポルトガル語(9名) インドネシア、インドネシア語 (1名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	日常生活や職場に必要な語彙・表現の学習、能力試験対策等。
②	5月16日 9:30-12:00	2時間 30分	8名 (2名)	ブラジル、ポルトガル語(5名) インドネシア、インドネシア語 (3名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	接続詞の用法、時の表現の漢字表記等。
③	5月30日 9:30-12:00	2時間 30分	6名 (3名)	ブラジル、ポルトガル語(4名) 中国、中国語(2名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	長音の表記、能力試験対策等
④	6月6日 9:30-12:00	2時間 30分	10名 (5名)	ブラジル、ポルトガル語(8名) 中国、中国語(2名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	場所・交通手段を表す言葉の漢字表記、能力試験対策等
⑤	6月13日 9:30-12:00	2時間 30分	2名 (0名)	ブラジル、ポルトガル語(2名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	日常会話、時・場所を表す言葉の漢字表記
⑥	6月20日 9:30-12:00	2時間 30分	7名 (3名)	ブラジル、ポルトガル語(5名) 中国、中国語(2名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	日本の教育・学校制度に関する言葉漢字表記等
⑦	7月18日 9:30-12:00	2時間 30分	5名 (4名)	ブラジル、ポルトガル語(5名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	疑問詞の用法、対になる語の漢字表記
⑧	7月25日 9:30-12:00	2時間 30分	6名 (3名)	ブラジル、ポルトガル語(6名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	平仮名の読み書き、形容詞の語彙を増やす等
⑨	8月1日 9:30-12:00	2時間 30分	5名 (2名)	ブラジル、ポルトガル語(5名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	位置関係を表す言葉の漢字表記、広報を読む
⑩	8月22日 9:30-12:00	2時間 30分	8名 (3名)	ブラジル、ポルトガル語(5名) 中国、中国語(2名) インドネシア、インドネシア語 (1名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	漢字の偏、義務・必要・不必要の表現等

⑪	8月29日 9:30-12:00	2時間 30分	6名 (1名)	ブラジル、ポルトガル語(3名) 中国、中国語(3名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	自己紹介、依頼・断りの表現等
⑫	9月5日 9:30-12:00	2時間 30分	5名 (2名)	ブラジル、ポルトガル語(2名) 中国、中国語(3名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	一日の生活を漢字かな混じりの文章で説明する等
⑬	9月12日 9:30-12:00	2時間 30分	8名 (2名)	ブラジル、ポルトガル語(4名) 中国、中国語(2名) インドネシア、インドネシア語(2名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	提案の表現、外観・様態の表現、能力試験漢字語彙問題等
⑭	9月19日 9:30-12:00	2時間 30分	7名 (2名)	ブラジル、ポルトガル語(6名) 中国、中国語(1名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	列挙の表現、時間的前後関係を表す接続詞等
⑮	9月26日 9:30-12:00	2時間 30分	9名 (4名)	ブラジル、ポルトガル語(7名) 中国、中国語(2名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	挨拶の表現、形容詞の用法、能力試験語彙問題等
⑯	10月10日 9:30-12:00	2時間 30分	11名 (3名)	ブラジル、ポルトガル語(8名) 中国、中国語(3名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	飲食に関する言葉の漢字表記、休日の過ごし方を話す等
⑰	10月17日 9:30-12:00	2時間 30分	6名 (2名)	ブラジル、ポルトガル語(4名) インドネシア、インドネシア語(2名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	文化祭準備会議
⑱	10月24日 9:30-12:00	2時間 30分	16名 (7名)	ブラジル、ポルトガル語(12名) インドネシア、インドネシア語(1名) 中国、中国語(3名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	総社地区文化祭参加
⑲	10月31日 9:30-12:00	2時間 30分	10名 (5名)	ブラジル、ポルトガル語(5名) 中国、中国語(4名) インドネシア、インドネシア語(1名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	使役・受身の表現、丁寧語、旅行日程表を読む等
⑳	11月14日 9:30-12:00	2時間 30分	14名 (4名)	ブラジル、ポルトガル語(5名) 中国、中国語(5名) インドネシア、インドネシア語(4名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	類義語の区別、慣用句、好き嫌いの表現等
㉑	11月21日 9:30-12:00	2時間 30分	11名 (4名)	ブラジル、ポルトガル語(5名) 中国、中国語(6名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	新聞の見出しを読む、料理の手順を説明する
㉒	11月28日 9:30-12:00	2時間 30分	12名 (4名)	ブラジル、ポルトガル語(6名) 中国、中国語(6名)	教授者3名 補助者2名 保育者2名	面接の練習、会社に出す書類を書く、来年の抱負を作文

・交流会・イベント

回	開催日	テーマ	参加人数	備考
①	6月27日	フェスタ・ジュニーナ	約250名	地域のブラジル人学校開催のイベントに教室として協力参加。地域住民にブラジルの伝統行事を紹介。
②	8月8日	シュハスコ	31名	受講者と教室スタッフ、その家族でブラジルの伝統料理シュハスコを楽しむ。
③	9月25日	送別会	15名	10月に帰国するインドネシア人受講者(実習生)の送別会をカラオケ・レストランで開催。
④	10月3日	国勢調査票記入会	10名	外国人の希望者に国勢調査票の記入の仕方を指導
⑤	11月7日	紅葉狩り	6名	群馬の紅葉の名所、碓氷峠を散策
⑥	12月19日	忘年会	21名	年末の日本の行事、忘年会をポトラック形式で

(9) 特徴的な授業風景

◇授業・交流イベント風景

◆第1回交流会・イベント（フェスタ・ジュニーナ（ブラジルの収穫祭））

〈1〉開催日：6月27日

〈2〉時間数：4時間

〈3〉開催場所：旧総社小学校体育館

〈4〉参加者数：約250名

〈5〉内容：

- ・ブラジルの収穫祭「フェスタ・ジュニーナ」の伝統的舞踏を体験
- ・ブラジル伝統料理の調理・販売
- ・ブラジルの音楽ボサ・ノヴァの生演奏を鑑賞

〈6〉目的：

- ・同じ町内のブラジル人学校との協力関係・交流を深める
- ・教室の受講生の大半を占めるブラジル人の故国の文化・伝統を紹介する

〈7〉当日の様子：

近隣のブラジル人学校「NER前橋」が開催するイベント「フェスタ・ジュニーナ」に教室として全面的に協力。受講者、教室スタッフとも、前日の会場作りや販売用のブラジル料理の調理等の準備から、当日の模擬店での販売、後片付けまで参加した。

フェスタ・ジュニーナはブラジルの収穫祭で、独特の服装・化粧・舞踏を特徴とする。日本ではまだあまりなじみがなく、教室の日本人スタッフは、事前にブラジル人受講者からこの祭りについて学んで当日に臨んだ。

当日は、多くの日本人を含む約250名の参加者を数える盛況ぶりで、地元地方紙にも写真入りで記事が掲載された。一般の日本人参加者も、ブラジルの料理、舞踏、音楽の演奏などを違和感なく楽しんでいた。

◆第3回交流会・イベント（送別会）

〈1〉開催日：9月25日

〈2〉時間数：3時間

〈3〉開催場所：

カラオケレストラン シダックス 前橋上小出店（前橋市上小出町）

〈4〉参加者数：15名

〈5〉内容：

- ・カラオケを楽しみながら会食
- ・帰国する受講者によるスピーチ

〈6〉目的：

- ・帰国する受講者を送る
- ・日本の典型的な大衆娯楽、カラオケを体験

〈7〉当日の様子：

・帰国するインドネシア人受講者（実習生）2名のため、カラオケ・レストランで送別会を開いた。二人とも、前々期（20年度）から教室に通って日本語を学び続けただけに、当日は、立派に日本語で帰国のスピーチをした。

・今や世界に広まった日本の大衆娯楽、カラオケを参加者皆で楽しんだ。残念ながらインドネシアの歌はなかったが、インドネシア人参加者は日本の歌をよく知っていて、上手に歌いこなしていた。

・この日は、インドネシア人実習生の受け入れ機関である、日本インドネシア経済協力事業協会の関係者も招き、交流を結んだ。

◆第4回交流会・イベント（国勢調査票記入会）

- 〈1〉開催日：10月3日
- 〈2〉時間数：2時間
- 〈3〉開催場所：総社公民館
- 〈4〉参加者数：10名
- 〈5〉内容：国勢調査票の記入法の指導
- 〈6〉目的：外国人にとって困難な書類の作成を支援する
- 〈7〉当日の様子：
 - ・国勢調査票は外国人にも提出が求められるものだが、その作成は、日本語を学習中の外国人にとっては難しい面もある。入門段階の学習者はもちろんだが、会話はある程度できるが読み書きは困難という者にとっても同様である。そこで、教室として、希望者に国勢調査票の記入指導をおこなうこととした。
 - ・当日は、日本人スタッフと通訳が、参加者一人一人に、個別的に記入の指導をした。勤務先に提出する書類等、国勢調査票以外の書式の記入指導を希望する参加者にも、可能な限り対応した。

◆第18回授業（総社地区文化祭参加）

- 〈1〉開催日：10月24日
- 〈2〉時間数：2時間30分
- 〈3〉開催場所：前橋市立第六中学校
- 〈4〉受講者数：16名
- 〈5〉内容：
 - ・地域の自治会、文化・教育団体が中心になって開催する文化祭に参加
 - ・ブラジル料理の牛肉の串焼きを販売、中国茶を無料で提供
 - ・日本語・ポルトガル語・中国語・インドネシア語の4ヶ国語の挨拶集を配布
 - ・外国語、外来語、日本における外国人事情についてのクイズ
- 〈6〉目的：
 - ・学んだ日本語を活かして、地域の活動に参加する。
 - ・受講者が自ら出身国の食文化を紹介して、積極的に情報の発信源となる。
 - ・地域の一般の日本人住民と交流を深め、多文化が共生する文化的に豊かな地域社会の形成を促進する。
- 〈7〉当日の様子：

今回で30回目を迎える総社地区文化祭は、地域の自治会や、様々な文化・教育団体が中心となって例年開催している行事。地元総社町の住民を中心に多くの参加者を集め、書道、陶芸、生け花等の作品展示、舞踊、音楽等の舞台発表、および模擬店での物品販売が行われる。好天に恵まれたこの日も、多くの人々が訪れた。今回の当教室のような形で外国人が参加したことはこれまでにはなかったようであり、どのような反応があるか不安もあった。

当日は模擬店で、ブラジル料理の牛肉の串焼きを販売し、中国茶を無料で提供した。牛肉の串焼きは、その場で炭火で調理し、中国茶は、本格的な中国の茶道具を用いてその場で淹れたものを出したので、多くの一般の参加者を引きつけることができた。また、模擬店で流していたブラジルや中国の音楽に興味を引かれて立ち寄る人々もいた。他にも、日本語・ポルトガル語・中国語・インドネシア語の4ヶ国語対照の挨拶集を配布したり、外国語、外来語、日本における外国人事情についてのクイズに答えてもらったりした。

結果として、外国人受講者が多くの地域住民と交流でき、教室の活動について知ってもらうことができた。さらに毎年文化祭の運営に携わっている公民館の関係者からも、「例年より賑やかでよかった」「新鮮な印象の文化祭となって、盛り上がった」と、好意的な感想が寄せられた。

今年度の教室の目的は、「学習者が、学んだ日本語を活かして自ら情報を発信する側となり、地域の活動に積極的に参加する。それによって多文化が共生する、より豊かな地域作りに貢献する」ということであり、この文化祭への参加は、その目的の実現に向けての大きな一歩になった。

◆第5回交流会・イベント（紅葉狩り）

〈1〉開催日：11月7日

〈2〉時間数：6時間

〈3〉開催場所：碓氷峠（群馬県安中市松井田町）

〈4〉参加者数：6名

〈5〉内容：

紅葉鑑賞、史跡散策、鉄道博物館見学

〈6〉目的：

- ・日本の秋の風物、紅葉狩りを体験。日本の自然に触れる。
- ・日本の歴史・文化に親しむ。

〈7〉当日の様子：

群馬県内有数の紅葉の名所、碓氷峠を、受講者、日本人スタッフ、前橋市内の他の日本語教室の講師とで散策。当日は穏やかな日和、紅葉も盛りで、受講者は故国の風景とはまた違った日本の秋の自然美を楽しんでいた。ひらがな・カタカナの学習を終えた受講者は、唱歌「もみじ」の歌詞の刻まれた銘板を読んで、学習の成果を実感していた。記念写真の撮影を頼む等、一般の日本人観光客とも交流できた。

碓氷峠はまた、古くから交通の要所・難所であり、アプト式鉄道の導入、幹線の電化が国内で初めてなされた地でもある。そうした事情から、鉄道関係の史跡、文化財、施設も多い。この日は、明治時代に鉄道橋梁として建造されたレンガ造りの「めがね橋」など、現在は廃線となって遊歩道化されている鉄道跡を散策、旧碓氷線を走るトロッコ列車にも乗った。最後に訪れた鉄道資料館では、外国人受講者は鉄道模型等の展示物に見入っていた。日本の鉄道の歴史に直に触れることができた旅であった。

◆第21回授業（料理の手順を説明する・餃子作り）

〈1〉開催日：11月21日

〈2〉時間数：2時間30分

〈3〉開催場所：総社公民館

〈4〉参加者数：11名

〈5〉内容：

- ・実際に餃子を調理しながら、その手順を説明する表現を学ぶ
- ・出来上がった餃子で会食

〈6〉目的：

- ・実際の場面で、必要な表現を学び、会話の練習をする。
- ・当教室ではブラジル人について多い中国人受講者の故国の食文化を、他の受講者、スタッフに紹介。

〈7〉当日の様子：

教室の中国人受講者たちが、本場の中国料理を紹介したいと、自ら企画・準備して実現した。

当日は公民館の調理場を借り、中国人受講者が中心になって餃子を作った。日本人の教室スタッフがそれを手伝ったので、必然的に日本語で調理の手順を説明することになり、実際の場面で必要な表現を、現場で学び、練習することができた。スタッフも積極的に質問し、より多くの言葉、表現を学べるよう促した。

餃子は、小麦粉をこねて皮から手作りした本格的なもの。また、豚肉を食べないイスラム教徒の受講者や菜食主義の教室スタッフのために、肉の入らない餃子も用意され、教室の文化的多様性が反映されていた。

最後に、出来上がった餃子で会食を楽しんだ。話題の中心はやはり中国の文化、歴史であり、兵馬俑、紫禁城、京劇等について中国人受講者が日本語で皆に説明した。

授業





(10) 活用した日系人等（日本語を母語としない）の名簿

氏名	母語（国籍）	来日年（日）数	参加回数	当該教室での役割
岩井 愛	ポルトガル語 （日本）	14年	16回	教授者、通訳
田中まり子	ポルトガル語 （ブラジル）	22年	5回	教授者、通訳
古谷アダリセ	ポルトガル語 （ブラジル）	17年	1回	教授者
フランシスカ・モニカ	インドネシア語 （インドネシア）	6年	1回	教授者
太田マルシオ	ポルトガル語 （ブラジル）	5年		翻訳者

4 事業に対する評価について

(1) 当初の学習目標の達成状況

1. 事業目的、教室全体の目標の達成状況

① 目的・目標の内容

今年度は、「日本語力を向上させることで、外国人が自身の知識・技能を活かして、自ら情報を発信し、地域の活動に積極的に参加して、それによって、外国人自身の自己実現を図るとともに、地域の活性化、多文化が共生する、文化的に豊かな地域の形成に貢献する」ことを目的とし、具体的な目標として、地域の文化祭に教室として参加し、出身国の文化を他の参加者・団体、地域の住民に紹介し、交流を深めることを掲げた。これは前年度の、「外国人住民が自尊心を持って、不安のない快適な自立した生活が送れるようになる」という目的をさらに発展させたものである。すなわち、日本語を学ぶことでまずは自分の生活を改善し、次にその成果を地域社会にも還元してゆくということである。したがって、今年度の目的も、この前年度の目的の実現をより確かなものしていくことなしには実現しえないものである。

② 考察

前年度の目標と同様、今年度の目標もまた目指すべき理想であり、短期間の日本語教室運営によって、完全に達成できるものではないであろうし、その達成の直接的な評価も難しい。また、受講者の希望は、まずは基本的な日本語力の向上であり、「情報発信、地域貢献」を目指す運営側との「温度差」も感じられた。やはり、受講者の側から見れば、まだ自身の生活を改善するという前年度の目的が十分に達成されたとはいえないということかもしれない。

一方で、受講者の要望にしたがって授業を組み立てていくことを目指した今回の教室では、受講者の側の自発的な企画によって実現した授業、イベントもあった。そして、今年度の教室の活動の中で最も重要なものであった、地域の文化祭への

参加に向けては、授業後に何度かスタッフ、受講者で会議をもったのであるが、そこでも、この文化祭参加をよりよいものとするため、受講者が積極的に意見を出し、議事を決めていった。さらに、当教室の受講者が、前橋市国際交流協会主催の「国際交流パーティ」で料理作りのボランティアに協力する等、直接教室と関係のない地域の団体の活動にも自主的に参加する例があった。

③ 結論

今年度の目標の実現に向けて、前進があったとはいえるであろう。受講者の側にも、必ずしも明確かつ具体的なものではないかもしれないが、情報を発信し、地域に貢献したいという意識はある。一方で、外国人の生活を改善するという前年度の目的も、まだ十分に実現されたとはいえず、これからもこの目的の実現に向けた取り組みが必要である。したがって、これまでの成果を活かし、さらに教室の活動を継続・発展させていくことが必要である。

2. 個々の学習者の目標達成状況

- ・日本語能力試験2級合格者1名
- ・再就職の決まった受講者1名
- ・その他、一部の個々の学習者の目標達成状況については、次の(2)「学習者の習得状況」の項で、担当の講師より報告

(2) 学習者の習得状況(各クラスの担当講師による報告)

[1] 文法・会話クラス

1、文法を理解しながら、流暢な会話がしたい派遣労働者

本人達が持っているテキストを使って、つまづいている所をアドバイスしながら授業を進めた。ときどき担当者が変わると、引き継ぎがうまくできるようなしくみを具体的に作れなかった。また、目標が明確でないため、なかだるみの時期もあった。しかし、後半は自身で積極的に話すことにより当初より、会話のやり取りがスムーズにできるようになった。継続して参加してくれているので定着もできた。

2、学校で学んだ日本語を生活の場面や職場でうまく実践できない技能実習生

自己紹介や学校で専攻した専門の言葉や実際に仕事で使っている言葉を使って日常の出来事を説明してもらった。職場のどんな場面で困っているかをもっと聞き出せばよかった。違う環境で働く、違う国籍の技能実習生たちが自分のことを話せたことで、日本での生活の大変などを共有できてよかった

3、職場で使う読み書きを学びたい派遣労働者

長く日本の会社で働いていて会話ができるので、その内容を書き言葉に注意しながら書いてもらったり、実際、会社で使っている提出書類を書いてみたりした。継続しての参加ではないので読み書きの定着ができなかったが、具体的な日本語で困っている問題を素早く解決できた。

4、学んだ日本語を定着させたい日本語学校の生徒でもある求職者

みんなの日本語を使って既習した所に注意しながら、他の学習者と会話してもらったり、日本の文化に知って生活に慣れてもらうため、年賀状や面接の紹介をした。

5、中国人技能実習生

学習者は、来日して数ヶ月たっていて仕事や日本での生活にも慣れてきたという技能実習生と、来日して間もない技能実習生の2名であった。2名とも国で日

本語の勉強をしてきており、中級レベルで学習意欲も高い。

(1) 授業（指導）内容

来日して間もない学習者が近日中に面接を受ける予定があるというので、面接の練習を行った。面接の内容や仕事について、学習者同士が日本語で情報交換できた点がよかった。また、授業の日が12月であったことから年賀状を取り上げた。年賀状に書かれている言葉、干支、喪中はがきの説明や、年末年始の口頭での挨拶についても紹介した。そのほか学習者からの質問にこたえた。質問の内容は実際に日本人が話している言葉についてで、普段の生活の中で日本語について気になっていたこと結構あるようであった。

(2) 使用教材

- ・「文化中級」「中級から学ぶ日本語」を学習者が中級レベルの教材はどんなものがあるのか知りたいようだったので紹介した。
- ・年賀状

(3) 学習者の習得状況・今後の課題

授業の内容は、学習者の要望に合わせたもの（面接の練習）と質問事項にこたえるものだったので、理解し納得していた。授業を担当したのは初めてで1回だけだったので、学習者の状況が把握できていなかった。今後、活動を継続していくことで、学習者のニーズに合った授業のテーマや教材を提供していきたい。

6、中国人技能実習生の配偶者（妻）

学習者は国で日本語を独学で学習した後、来日した。来日後も数ヶ月間、週3日日本語学校に通っていた。初級前半。

(1) 授業（指導）内容

授業1回目は初めに挨拶をして、地図を使って出身地をたずねた。出身地について身振り手振り、筆談を交えて話してウォーミングアップとした。その後、日本語学校で使用している「みんなの日本語」の既習内容で質問をした。学習者にも質問をしてもらい私がこたえた。

授業2回目は、中級レベルの中国人技能実習生と一緒にあった。アルバイトの面接という設定で、面接の練習を行った。中級レベルの学習者と一緒に授業の内容がどうしても難しくなってしまうので、やさしい言葉で言い換えたりしながら進めた。

(2) 使用教材

- ・「みんなの日本語」
- ・地図

(3) 学習者の習得状況・今後の課題

既習の文法を使った口頭での会話練習は楽しそうに行っていた。質問も自分で考えて、積極的に取り組んでいた。授業2回目は、中級レベルの学習者と一緒にだったこともあり、内容が難しくなってしまったことが反省点である。話している内容がわからないため疎外感を感じてしまわないように、易しい言葉で話しかけるようしたが、今後は初級、中級レベルが一緒でも参加できるようなアイデアを用意しておきたいと思った。

〔2〕能力試験対策クラス

「地域に貢献する活動」と能力試験対策とは目的が異なるように思われるが、日常会話に支障のないレベルの学習者でも、外部に発信していくためには日本語で話すことに、より自信を持つことが必要と考え、そのきっかけ作りとして試験を紹介し、またコース開始前から受験希望の学習者もいたため、問題に取り組みながら、言葉や表現の幅を広げていくようにした。

目標が明確で期限も決まっていること、メインテキストも選び易く一冊終わると

達成感があること等学習の計画立てや振り返りはしやすかった。
限られた時間を有効に使うために、語彙や読解は自宅学習とし、テキストの説明だけでは分かりにくい文法項目の解説や例文作りを中心に行い、実際の会話場面
を想定できるように心がけた。

〔3〕表記クラス

- ・ 学習者：
「ひらがな・カタカナの書き順からしっかり学びたい」という熱意ある学習者が参加し、継続して参加した受講者も多かった。会話には問題のない学習者が中心で、授業は進めやすかった。
- ・ 習得状況：
初回授業から参加している受講者は、ひらがな・カタカナはほぼ正確に読み、書くことができるようになった。
漢字については、繰り返し取り上げたものについては、かなり、読め、書けるようになってきている。また、書くのは難しいが読むことはできるという漢字も多い。部首についても、いくつかのものについては、その意味を理解し、未知の漢字の意義の推測に利用できるようになった。
- ・ 課題：
長音、拗音、撥音などは、まだ間違えやすい。
漢字についても、子どもの学校からの連絡や街中の表示が分かり、書式に記入できるなど、日常生活に十分な読み書きができるまでには、もう一步の前進が必要。今後は、個々の言葉や漢字を書くことからさらに進んで、それを自分の言葉で、書き言葉の文章に組み立てていくことを目指したい。

（3）日本語教室設置運営の効果、成果

1. 学習者

地域には、独学独習で日本語を学ぶ外国人も多い。都合のよい時間帯に開設している教室がないなど、やむをえない事情による場合もある。しかし大抵の学習者にとっては、教室に通うことでより能率的に日本語を習得できるといえよう。これは、会話能力の習得においては明白であるが、その他の点でも同様である。教室では、疑問点は直接講師にたずねることができるうえ、毎週授業があるということが、学習の動機付けになる。この教室では、文法学習、日本語能力試験対策にも重きをおき、受講者の一人は能力試験2級に合格した。
また、学習者同士で教えあうことも有効である。この教室でも、早い時期から参加し始めた学習者が、新規の受講者に、自分の経験を踏まえた助言をしていた。

同時に日本語教室は、ともすれば社会の中で孤立してしまいかねない外国人が、他の人々との接触を保てる場である。国籍や母語を同じくする、あるいは異にする他の学習者と交流し、生活上、日本語学習上の情報交換もできる。実際、母語も国籍も異なる受講者同士が、この教室で出会ったことをきっかけに、友人として親交を結ぶようになっていった。

また教室スタッフは学習者に積極的に言葉をかけ、学習者の話は誠意を持って聞くように努めた。学習者にとっては、たとえ十分に流暢でなくとも「自分の日本語が聞いてもらえる場」となっていた。さらに、授業後に連れ立って行楽に出かけたり、お互いの自宅に招きあったりと、教室スタッフと学習者という関係を越えて、親交を結ぶこともできた。

交流イベントも、受講者、スタッフがともに協力し合い、楽しみながら仲間意識をはぐくむ機会として効果的であった。特に今年度は地域の文化祭に教室として参加したのであるが、その参加のあり方について、授業後に何度か受講者・スタッフを交えての会議を持ち、そこでは受講者も積極的に意見を出し、討論に参加していた。

それ自体、実際的な日本語の練習になると同時に、地域参加の意識を引き出すことにもつながった。

教室では、必要があれば通訳者の協力も得て、学習者の生活相談にも応じた。履歴書の書き方、面接の受け方など、多くの学習者が希望していることについては授業の内容として取り入れ、子どもの学校に提出する書類の作成、入管手続などは個別に対応した。普段通っている教室、顔なじみのスタッフということで、学習者にとっては気軽に相談できる場となっていたと思える。

日本語を学ぶだけでなく、こうした交流、情報交換、相談の場としての教室が地域に存続することは、在住外国人にとって重要であろう。

2. スタッフ

教室は、日本語指導者の育成という機能も果たしている。

当教室のスタッフの中心は資格・経験を有する日本語教師であり、日本語教師養成講座の講師経験者もいる。補助スタッフはこのような資格・経験のある講師の授業に参加することで、実地に日本語指導を学ぶことができた。実際、今年度の教室では、前年度・前々年度と補助員として経験を積んだスタッフが、講師として授業を行った。

また日本語指導に関心のある見学者を積極的に受け入れ、授業にも参加してもらった。

3. 通訳

ある程度の日本語能力を有する学習者については、日本語のみによる授業も効果的であろう。しかし、全くの入門者の場合、日本語のみによる授業ではほとんど理解できず、教師との意思の疎通も図れないため、学習を継続することが苦痛になりかねない。初級段階でも、よほど細かいクラス分けをしないかぎり、到達度に関きのある学習者が同じクラスでともに授業を受けることになり、どの学習者を基準に授業を組み立てるか、困難な判断を迫られることになる。そして、どのように授業を進めても、一部の学習者には「内容が簡単すぎる」「難しくついていけない」という不満が残ってしまう。

このような問題を解消するため、当教室の授業には通訳者が参加した。これにより、入門者は授業にストレスを感じることなく、能率的に理解しながら学習を続けることができ、初級レベルの受講者の到達度の格差も補いながら授業をおこなうことができた。

また、受講者から様々な生活上の相談を受けたときにも、通訳者の協力で適切に対応することができた。

4. 指導法

NPOプロジェクトまえばしでは、今年度、昨年度、一昨年度の日本語教室の運営、およびそれ以前から続けている様々な活動を通じて、地域の在住外国人の問題に取り組んできた。また教室では、受講生が実際に経験した問題などを授業で取り上げることも多かった。このような事情から、地域の学習者の要望、実情を反映した授業内容が形成されてきた。これは、今後この地域で日本語指導を行う上で、有益な資産となりうる。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

1. 交流イベント

当教室では、授業の他に計6回の交流イベントを開催した。その目的は、学習者が授業で学んだ日本語を実践しつつ地域の日本人住民と交流するため、そして日本の文化を学び、自分の背景となっている文化を日本人に紹介するためである。

近隣のブラジル人学校のイベント「フェスタ・ジュニーナ」に協力参加した際は、地元の地方新聞に写真入の記事が載るほどの盛況の中、実に多くの地域住民にブラジルの料理・音楽・舞踏など様々な文化を紹介し、交流を結ぶことができた。

群馬県有数の紅葉の名所、碓氷峠を訪れた紅葉狩りイベントでは、日本の自然、風物に触れると同時に、記念写真の撮影を頼んだり、あるいは頼まれたりするなど、一般の観光客とも交流をもつことができた。

このように、交流イベントは日本語の習得だけでなく、それと不可分の関係にある日本の文化を知る機会として、また外国人が周囲の人々に積極的に働きかけて地域に溶け込み、地域の日本人の多文化共生の意識を高めるためにも効果的であった。

教室にとっては、地域の様々な分野で活動する個人や他の団体との連帯が生まれ、あるいは強化されたことの意義も大きい。

2. 地域の文化祭への参加

今年度の事業目的である、地域活動への積極的な参加を実践するため、地域の自治会や様々な分野で文化・教育関係の活動を行っている諸団体が中心となって例年開催している文化祭に、教室として参加した。

文化祭参加のあり方について、事前に何度か受講者・スタッフを交えた会議を持ったのであるが、そこでの討論への参加は、受講者にとって、実際的な場で日本語を使う訓練にもなり、地域参加の意識を高める効果もあった。

当日は、模擬店をだして、ブラジル、中国の音楽を流しながら、ブラジル料理の串焼肉を販売し、中国茶を無料で提供した。他に4ヶ国語対照の簡単な挨拶集を配布し、外国語・外国人に関するクイズを実施した。多くの人が音楽や料理に興味をもって模擬店を訪れ、交流を持つことができた。例年、文化祭の運営に関わっている公民館の関係者からも、いつより賑やかで、新鮮な文化祭になったと、好意的な評価をえた。教室の存在について地域の人々に知ってもらえたことだけでも、意義は大きい。

一つの大きな仕事を共同でなしたことで、受講者・スタッフ間の信頼関係も強まった。

3. 他の日本語教室との連携

当教室の講師の中には、地域の他の日本語教室でも指導をしているものもいる。また、他の教室の日本語教師の見学を積極的に受け入れ、授業やその後のスタッフ会議にも参加してもらった。こうした交流を通じて、意見・情報の交換、相互の授業の検討をおこなった。これは地域全体の日本語指導の質を高めることにつながるものである。

さらに、多くの技能実習生が、他の日本語学校からの紹介で当教室に参加するようになった。従来の広報活動がある程度限界に来ており、学習希望者に教室の存在・活動が十分に伝わらないという状況があったので、このような協力関係は貴重である。

(5) 改善点、今後の課題について（具体的に記述する。）

a. 現状

一昨年度以来教室運営を続けてきて、当教室は、地域の在住外国人の間に「いつもやっている教室」として定着しつつある。受講者の中には、一昨年度からほぼ皆勤で出席している者、夜勤明けにもかかわらずそのまま教室に駆けつけてくるもの、他の日本語教室と掛け持ちで参加しているものもいて、学習者の学びたいという意識は非常に高い。

結果としては、1名の日本語能力試験2級合格者を出したほか、より条件のよい仕事への再就職が決まったものもいる。

スタッフにとっても、教室は心のよりどころとなっている。日本語指導の資格や能力、語学力、ボランティア活動や海外在住の経験を活かせる場であると同時に、文化の多様性が尊重され、日本人・外国人の区別なく皆が自尊心を持って快適に暮らせる地域社会を作るという理想を共有できる場でもある。見学者の中にも、何らかの形で教室に参加したいという声が多い。

当教室の特質である、託児所の完備、通訳の補助、生活相談、各種手続の支援も、受講者の間で好評である。子育て中の学習者でも、全くの入門者でも安心して参加できる教室の存在意義は決して小さくはないであろう。

b. 今後の課題

1. 教室運営

安定して事業を継続してゆくには経済的基盤の確立が必要であるが、日本語教室の運営だけでは、それは容易ではない。スタッフや学習者の能力を活かしながら、教室運営のための資金確保を図れる方法はないか、引き続き検討中である。

2. 事業の目的

事業の目的として掲げたのは、「外国人が、日本語能力を向上させることによって、その持てる知識・技能を活用し、みずから情報を発信する側となって、積極的に地域の活動に参加できるよう、日本語学習の支援を行う。それによって、外国人自身の十分な自己実現を図るとともに、地域の活動を活性化し、多文化が共生する、文化的に豊かな地域の形成に貢献することを目指す」というものであり、これは前年度の、「外国人住民が自尊心を持って、不安のない快適な自立した生活が送れるようになる」という目的をさらに発展させたものである。そして、この目的の実現に向けて確実な前進があり、一定の有意義な成果があったとはいえる。

しかし、受講者の希望は、まずは基本的な日本語力の向上であり、「情報発信、地域貢献」を目指す教室側の思いとは必ずしも一致していなかったのも事実である。受講者の側から見れば、まだ自身の生活を改善するという前年度の目的が十分に達成されたとはいえないということかもしれない。地域活動への参加を実践するために行った地域文化祭への参加についても、日本語学習に重点をおきたい受講者には過重な負担となってしまったかもしれない。

目的の設定に当たっては、学習者の要望を十分に聞き、取り入れてゆくことを、さらにいっそう心がけたい。

3. 授業日、時間帯

授業をおこなう曜日、時間帯については、様々な事情を考慮し、できるだけ多くの学習者が無理なく継続して参加できるようにと考え、日曜日の午前9時半から12時までとした。

しかし、家族のいる学習者にとって日曜日はそろって行楽等に出かける機会でもあり、学齢期の子どもがいる学習者の場合、学校の行事と重なることもある。また、外国人労働者の中には、日本人の同僚が休みを取る土曜・日曜に勤務するものも多い。こうした事情で、出席を継続できなくなる受講者も少なくなかった。

あらゆる点を考慮して、やはり、日曜の午前が授業時間として最適であることは否定できない。学齢期の子どもと一緒に継続して参加する受講者がいるのは、この時間帯のためかもしれない。地域には、他に日曜日に授業をしている教室がないことから、当教室が日曜日に授業をする意義は大きい。では、その時間に参加できない学習者にいかに対応していくか。できる範囲で、教室スタッフが受講者の都合のよい時間に、受講者の自宅におもむくなどして補習を行うという試みを始めているが、さらに日曜の午前と平行して、他の曜日、時間帯にも授業をおこなうことも検討している。

4. 授業形態

今年度の当初は、受講者の要望に直結した授業を行うこと、および学習者自身に目的意識をもって参加してもらうことを目指して、固定したクラス分けをせず、各授業日に参加した受講者の要望を聞き、各自の日本語能力を考慮したうえで、その場でクラスを作って授業を行った。受講者の継続した参加が難しく、各回で受講者の顔ぶれがことなる、といことも、このような方式を採用した理由である。

これによって、受講者はいつでも都合のよい時に参加して、希望する内容の授業を受けられることになり、一回一回の授業の満足度は高かったといえる。

しかし、事業期間の後半では、各受講者の学習目的がしぼられてきたこともあり、実際は、「基本文法・会話」、「能力試験対策」、「表記・漢字学習」などほぼ固定したクラスで授業を行うことになった。また、特に入門から初級段階の学習者の場合、継続性・一貫性のある授業を通じて学習を積み上げてゆくことも必要であり、今期当初のような形態では効果的に学べなかったのではないか、という思いもある。クラス分けが一定しないことで、長期的な観点からの学習者の到達状況の把握とそれに対する適切な対処が難しいという問題もあった。

今後は、受講者の要望に応じて柔軟に構成するクラスと、ある程度継続参加の可能な受講者を対象に、期間を通じての計画的授業を行うクラスという二つの形態を併用するなど、検討したい。

5. 学齢期の外国人児童への対応

きわめて幼少の時期に来日した外国人児童の場合、母語よりも日本語のほうが流暢であることも稀ではなく、日本人と同様に小・中学校に通い、さらに高校にも問題なく進学できる。

一方で、ある程度高学年になってから来日したため、日本の学校の授業についてゆけるだけの日本語能力を身につけられていない児童、あるいは、日本の学校になじめないなどの理由で、学校をやめてしまい、しかも経済的な事情などから外国人学校等にも通っていない、いわゆる不就学児童の場合は、深刻である。日本の学校に通い続けられれば、中学校までは卒業できるが、高校進学は難しい。全くの不就学の場合は、中学卒業の資格もなく、社会において行き場をなくしてしまいかねない。

こうした児童のために地域の日本語教室としてできることはないか。今年度は、前年度の当教室の受講者を中心とした外国人住民を講師に招き、日本人スタッフの子どもを含めた児童向けに簡単な外国語（ポルトガル語、英語）の授業を行った。外国人児童の母語を維持し、日本人児童が、自然に多文化・多言語の環境に親しむことに資するところがあったといえる。また、教室スタッフが受講者の自宅におもむいて補講を行う際に、子どもに学校の課業を教えることもあった。しかし、外国人児童が日本の学校の授業についていけるようにするには、十分とはいえない。教室としてさらにできる事はないか、考えたい。

6. 広報活動

集住地区である当地域には多くが外国人が居住し、日常生活の面でも、仕事上でも日本語の習得を必要としていると思われる。にもかかわらず、日本語教室の存在について、十分に知られているとはいいがたい。当教室の受講者も、ほとんどがスタッフや他の受講者の紹介によって、この教室を知ったとのことである。個人的な紹介があれば、安心して受講できるという利点はあるが、多くの学習者に周知するには限界がある。より効果的な広報手段を考えてゆきたい。

c. 今後の活動予定、展望

1. 日本語指導・教室の継続

地域の実情を考えると、今後もこの地域で日本語指導を続ける必要性は高い。在住外国人が、日本語が十分にできないために、様々な生活上の不便に耐えざるを得ない、

という状況はいまだにある。地域社会の様々な活動への参加ということについては、なおさら困難である。

もちろん、問題は外国人の側にばかりあるわけではない。集住地区でありながら、まだ日本人住民の間には外国人一般、あるいは特定の国、民族に属する外国人に対する偏見が残っている。悲しむべきこと、恥ずべきことであるが、「近所で空き巣などの犯罪があると、まっ先に外国人を疑ってしまう」という声も聞く。しかし、このような偏見も、外国人と日本人の意思の疎通が十分に図られ、相互理解が進めば、徐々に改善してゆくとと思われる。

そして、当教室の受講者についていえば、日本語を学ぶことでこうした状況を改善していきたいという気持ちは非常に強い。今年度の地域文化祭への参加においても、外国人受講者は、積極的な姿勢で文化祭に向けた会議にも参加し、当日は日本人住民との交流に努めていた。

スタッフの側も、学習者の熱意に応えるためにも、また自分自身の心のよりどころとしても、教室を存続させる意思は固い。

よって、いかなる形態によるものであれ、いずれにしてもこの地域で日本語指導を続けてゆきたいと考えている。

2. 授業形態・内容

これまでの日本語教室の運営や交流行事の開催によって蓄積された、日本語指導技術・教材、外国人を取り巻く地域事情についての情報などを活用してゆくことは、言うまでもない。

人的な面でも、現在参加しているスタッフのほとんどが継続して参加する意向である。さらに、授業見学や交流イベントに参加してこの日本語教室の活動に関心をもち、何らかの形で教室運営に参加、協力したいと申し出てくれているものも少なくない。

授業のあり方については常に検討を重ねていく必要がある。今年度は、学習者の要望に直結した授業を行うことを目指し、毎回の授業で、その日に参加した受講者の要望を聞いて当日のクラス分け、授業内容を決めていった。継続参加の困難な受講者でも、いつでも都合のよい授業日に参加し、希望する授業が受けられるという肯定的な面もあったが、一貫性のある授業ができない、スタッフの授業の準備が困難といった問題もあった。

いかなる形態の授業を行うか、受講者の実情や要望に常に気を配りつつ、考えていきたい。

継続学習ということについていえば、言語の習得には継続学習が必要であることは論をまたないが、多くの学習者が家族や仕事を持っているという現実を考えると、継続学習の必要性を強調しすぎれば、かえって学習者を教室から遠ざけることになりかねない。当教室は、継続学習を促しつつも、学習者がいつでも気軽に参加できるような教室でありたい。

3. 地域社会との連携

当教室では、授業や交流イベントにおいて、地域の様々な分野で活動する個人や団体の協力を得てきた。交流イベントでは、多くの一般の日本人住民と交流が生まれた。このようにして、学習者が言葉だけでなく、地域のいろいろな文化を学び、地域社会に溶け込むことに、一定の成果をあげることができた。

このような形での地域との連携は、今後も続けていきたい。公民館を活動場所として利用することで、同じ公民館を利用する他の様々な団体と交流が生まれる可能性があり、こうした結びつきは大切にしていきたい。

そして、「外国人が、日本語能力を向上させることによって、その持てる知識・技能を活用し、みずから情報を発信する側となって、積極的に地域の活動に参加できるよう、

日本語学習の支援を行う。それによって、外国人自身の十分な自己実現を図るとともに、地域の活動を活性化し、多文化が共生する、文化的に豊かな地域の形成に貢献することを目指す」という今年度の事業目的のより確かな実現のためにも地域社会との連携がますます重要になってくる。